

16 「テンション」

この季節、町の居酒屋などでは新入社員や新入学生の歓迎コンパ、というのが盛んなことだろう。そういつた宴席と隣合わせになったときに、最近やたらと耳につく言葉が「テンション」というやつである。

——いやあオカモトさん、のっけから凄いテンションっすね——

——今夜はいきなりみんなテンション高いんだから、まいっっちゃうなあ
なんてやりあっている。

「テンションが高い」といえば、盛りあがっている、気分がハイになっている、というような意味合いで、ほぼ認識されている。若者言葉というか、もともとはTVのバラエティー番組から発生した言いまわし、と思われる。

たとえば久本雅美とか出川哲朗のような、登場するや否や早口や大声でハシヤギまくるキ



ヤラクターを指して、まわりのタレントが「ボント、マチャミはテンション高いんだから」などと突っこむ。

「今日のスタジオ、テンション低いわ、サムイわあ」といったら、逆に白けたムードを表すことになる。

僕も、この何年か無意識のうちに、そういった意味で「テンションが高い、低い」などと使っていたところがあるのだが、考えてみればおかしな言いまわしである。

「テンション (tension)」というのは「不安」といった意味しか載っていない。

「朝鮮半島の政治情勢が緊張している」「中東情勢が緊迫化しつつある」なんて情報を伝える英字新聞に出てくる単語だ。久本雅美のテンション、のつもりでそういった記事を読

むと、ちよつと妙なことになる。一触即発の状況が、なんだかとてもなく明るい「笑つていいとも」のスタジオオミtainな光景に思えてきたりする。

緊張した場というのは、本来、言葉も出ない、張りつめた空気がたちこめた状況なわけだから、全く逆の意味合いで使われていることになる。おそらく最初は、バラエティー番組などに出演した文化人やシロウトが、緊張のあまり上ずつた声を出したり、妙に間のズレたりアクションをした、なんてあたりから、誤用されるようになっていったのであろう。

ズレても浮きあがった感じでも、とりあえずなんとなく盛りあがっているような絵が作ればOK、という、いまのTV番組の姿勢を象徴している言葉、ともいえる。

それが巷に流れると、「オカモトさん、すごいテンションで呑んですすねえ」と、もはや英訳不能の方向へ発展していく。

そういうえば昔、僕の親の世代の人たちが、酒に酔って上機嫌で喋ったりしている状態のことを「メートルを上げる」といった。これも本来の「計量値」の意味からかなり飛躍した用法であるが、いまは辞書にも載っている。「テンション」の誤用も、じきに国語的に認知されるのかも知れない。